

# 希望パス 友情ゴール



ハイチチームと日本チームの試合でボールを追う選手たち  
—ドミニカ共和国のサントドミンゴ自治大学グラウンドで  
18日、石戸撮影

## ハイチ大地震・親善サッカー

【サントドミンゴ(ドミニカ共和国) 石戸諭】ハイチ大地震で被災した子供たちを励まそうと、国際医療救済団体「AMDA」(本部・岡山市、菅波茂代表)が企画したサッカー親善大会が18日、ハイチの隣国・ドミニカ共和国の首都サントドミンゴでハイチ、ドミニカ、日本の少年たちが参加して始まった。

今年1月のハイチ大地震では約23万人が犠牲になったとされ、半年以上が過ぎた今も150万人前後が野外生活を続ける。ハイチからは少年16人が参加。日本からは大阪府のサッカーチーム「FC千里中央」、広島県、岡山県の中高中生計18人が参加した。会場のサントドミンゴ自治大学で、参加者は犠牲者に黙とうをささげ、「友情」「希望」と寄せ書きしたボールでプレーした。

ハイチチームを引率する歯科医マック・ケビン・フレデリックさん(37)はハイチの大学教授で、04～09年に岡山大に留学した。AMDAのサッカー交流の提案には、「『あなたたちを見捨てない』というメッセージが今、一番大事だと思った」と賛同した。

開幕試合では、日本とハイチが対戦。日本が勝ったが、ハイチの少年たちはゴールで全員がパフォーマンスを挙げて喜ぶなどピッチを躍動。昼食時にフレデリックさんが日本の中学生に「ハイチのことをハイチの子にも聞いて」と語りかけ、両国メンバーの輪ができた。

ハイチチーム最年少ファブリス・ヴィドリ君(11)は「夕食は時々無い」と語りだした。「こんなグラウンドでもっとサッカーをした」と少し控えめに話した。